

ネ

ネヴィル Emily Cheney Neville 一九一九

アメリカの児童文学作家。処女作『It's Like This, Cat 猫よ、こうなんだよ』(一九六二)でニューベリー賞を受ける。ドロップ・アウトした少年の抱く空虚感が猫への愛着で満たされ、父との断絶とその回復が第一人称形式で語られ、アメリカの「問題小説」の先駆けとなる。その後『Bernie Goodman ベリーズ・グッドマン』(六五)、『Garden of Broken Glass こわれたガラスの庭』(七五)など、悩みをもつティーン・エイジャーの物語を書き続ける。(原 昌)

ネクラソフ ニコライ・A Николай Алексеевич

Нерасов 一八二一—七八 ロシアの詩人。貴族の家に生まれた。民衆の悲しみを歌った多くの抒情詩、叙事詩が長年広く愛唱されてきた。代表作に『赤鼻のマローヌ』(一八六四)、『愛かぎりなく—テカプリストの妻』(七三)、『ロシアは誰に住みよいか』(七七)などがある。当

時の進歩的民主主義文学の拠点となった雑誌「同時代人」『祖国の記録』の編集、発行者でもあった。

(北畑静子)

ネーサン ロバート Robert Nathan 一八九四—

ニューヨーク生まれの作家、詩人。「ハーバード マンスリー」の編集者を経た後、詩やエッセイを発表した。作品は、小説・詩・戯曲など一〇編を超え、詩集には『青春は老いる』(一九二二)や『みどりの葉』(五〇)がある。『ジェニーの肖像』(四〇)は、詩的で幻想的な作者の資質が最大限に生かされた珠玉の名編。時間や空間を超えた画家エブソンと少女ジェニーの愛は永遠の命を保つ。(島 式子)

ネストリンガー クリスチーネ Christine Nöstlinger

一九三六— オーストリアの児童文学作家。ウィーン生まれ。ウィーンの工芸大学でグラフィックデザインを学ぶ。ラジオ・テレビの脚本で文筆活動をはじめ、一九七〇年最初の子どもの本『赤毛のフリーデリケ』を出版、以後ファンタジー、リアリズム両分野で旺盛な創作活動を行う。作品は絵本から成人向きの小説まであり幅広い。鋭い洞察で子どもの置かれている状況を捉え、深刻な問題を子どもの視点からユーモラスな筆致で描く。おしきせの倫理を奉る保守的俗物根性を風刺するが、社会批判の底には常に、弱者を思いやる温かいヒューマニズムが流れている。作品には自

伝的な『あの春はおそく来た』(一九七三)のほか、一〇代の少年少女を自立する大人への延線上で捉えた『イルゼねえちゃんの家出』(七四)、『グレートヘンは負けな』(八三)、『Off Obermeier オルフイー・オーバーマイヤー』(八四)などがある。七三年、『きゅうりの王さまやつつけろ』(七二)でドイツ児童文学賞受賞。八四年、国際アンデルセン賞受賞。

(川西美沙)

ネズビット イーディス Edith Nesbit 一八八八—一九二四 イギリスの作家、詩人。生前は詩や大人向けの小説も書いたが、死後現在に至るまで、当時の中産階級の子どもを生き生きと描いた児童文学作品で知られる。四人兄弟の末娘として生まれるが、農業学校の校長だった父はイーディスが三歳の時に他界、その後しばらくして姉メアリーの転地療養のためにヨーロッパ各地を転々、その間通った各学校ではかなりつらく悲しい思いをした。フランスのブルターニュや帰国後住んだ英国ケント州の屋敷で過ごした楽しい思い出は『バスタブル家の子供たち』シリーズなどにみごとに蘇っている。幼少時から読書好きで自分でも詩を書いていたネズビットは、一八八〇年に結婚したヒューバート・ブランドが共同経営者のもち逃げて文無しになった後、その才を使ってさまざまな方法で売文をし、家計を支えた。その勇ましい姿の一端は『若草の祈り』(二九〇六)の母親にうかがわれる。またそうした身す

ぎ世すぎの作家生活の一方で、ブランドとネズビットは社会主義団体フェビアン協会の創立に加わり、自宅をサロンとして多数の友人に解放したり、時代に先駆けた生活を実践するなど、大変に活動的な女性だった。友人にはウエルズ、バーナード・ショーなどもいた。

育てた子どもの中には夫ヒューバートがほかの女性に生ませた子どもも二人いた。四〇歳の時にたまたま書いた子どもころの思い出話をきっかけに人気作家となり、その後一〇年あまりの間に現代まで読み継がれている作品を多数書いた。タウンゼントが「ファンタジーとリアリズムの両方に長じている」と評しているほか、C・S・ルイスなどの作家の中にもファンがいる。リアリズム作品には『宝さがしの子どもたち』(一八九九)をはじめとするバスタブル家三部作がある。ファンタジーには『砂の妖精』(一九〇二)をはじめとするサミアド三部作があり、「日常と魔法の衝突」(猪熊葉子)をテーマにした「エウリディ・マジック」の分野を拓いたといえる。

『砂の妖精』よすなの *Five Children and It* エウリディ・マジック。はじめ各章が読み切りの形で雑誌に連載され、一九〇二年に一冊の本として刊行された。親もとを離れて田舎で休暇を過ごす五人の子どもを巡るファンタジー。子どもたちはサミアドという砂の妖精をみつけ、願いをかなえてもらう。この魔法は日没と

ともに消えてしまうので毎日新しい願いを一つかなえてもらうが、どれも子どもたちを窮地に陥れることになる。サミアドの変わり者ふりと、子どもたちの危機脱出の努力が楽しい。

【参考文献】吉田新一『イギリス児童文学論』（一九七八 中教出版）（酒井邦秀）

根本 進 ねもとすすむ 一九一六（大5） 漫画家。

東京都に生まれる。小学生時代、北沢楽天の時事漫画に影響されて「時事新報」に投稿を続け、慶応大学法科中退後、一九三二年時事新報社に入社。戦後、写真新聞「サンニユース」に、岡部冬彦とともにサイレント漫画を発表し、続いて風刺雑誌「VAN」や「新青年」などにもつばらサイレント漫画を発表。五一年二月朝日新聞夕刊に連載開始の「クリちゃん」により漫画家としての地位を確立し、六五年三月三一日連載終了。以後も「クリちゃん」を描き続けている。

（川勝泰介）

根本正義 ねもとよしまさよし 一九四二（昭17） 児童文学研究者。東京生まれ。立正大学国文学科卒。同修士課程終了。高校教師を経て一九八〇年より東京学芸大学助教授。はじめ鈴木三重吉「赤い鳥」を研究対象とし、昭和期ことに大衆児童文学に関心を移す。学風は手堅く、伝統評価、ナシヨナリズムの視座を重視する。

主著に『幼児教育のための児童文学』（一九七四）、『鈴

木三重吉の研究』（七八）、『昭和児童文学の研究』（八四）、『国語教育の遺産と児童文学』（八四）があり、しだいに国語教育研究に傾く。（宮崎芳彦）

ノヴァーリス Novalis 一七七一—一八〇一 ドイツロマン派の代表的詩人、小説家。本名フリードリヒ・フォン・ハルデンベルク。オーバーバーギーターシュテット生まれ。すべて詩的なるものは童話的でなくてはならぬ」と唱え、ティークらとロマン主義運動に貢献した。早逝した少女ゾフィーとの恋愛体験から生まれた『青い花』（一八〇二）は、未完ながらロマン派の名作である。『ザイスの学徒』（〇二）中の童話『ヒヤシンスとバラ』、長詩『夜の讃歌』も有名。（川西英沙）

野上 彰 ののがみあきら 一九〇九（明42）—昭42 詩人、劇作家。本名藤本登。徳島に生まれ、東京大学文学部を経て京都大学法学部中退。川端康成に師事。戯曲『夢を食う女』（起稿一九四〇、初演四八）を出発点に詩、戯